エリーナ・ガランチャ リサイタル

2020年 5月27日(水) 愛知県芸術劇場コンサートホール

18：30開演（17：45開場） S席￥18,000 A席￥15,000 B席￥12,000 C席￥8,000 D席￥6,000 学生（抽選・26歳以下）￥2,000（税込）

※学生（抽選／26歳以下）はHPよりエントリーのうえ抽選。学生証要持参。詳しくはhttps://cte.jp/をご覧ください。※未就学児入場不可。

プレイガイド 中京テレビ事業チケットセンター：052-320-9933（平日10:00～18:00／土・日・祝日休業）

- チケットぴあ：0570-02-9999（Pコード：168-932）
- e+（イープラス）：eplus.jp
- 栄プレチケ92：052-953-0777
- セブン-イレブン、ローソン、ミニストップ、ファミリーマート 店頭
- ローソンチケット：0570-084-004（Lコード：47803）
- 愛知芸術文化センターPG：052-972-0430
- 名鉄ホールチケットセンター：052-561-7755

一般発売日：11/29（金）10:00～

▼公演情報はコチラ

主催：CHUKYO TV

公演に関するお問合せ：中京テレビ事業 ☎052-588-4477（月～金 10:00～17:00／土・日・祝日休業） https://cte.jp/

Elīna Garanča

エリーナ・ガランチャ　リサイタル 2020

いまがキャリアの頂点！
これが本物のテクニックに支えられた世界最高峰の声だ

Elīna Garanča　エリーナ・ガランチャ

これほど美しく響くメゾ・ソプラノが、ほかにいるだろうか。その声は絹のようになめらかで、光沢がある。そして、彼女はこのうえなく上等な絹を、緻密かつ大胆に織り上げる。

エリーナ・ガランチャは、言うまでもなく現代最高のメゾ・ソプラノの一人だが、とりわけ、いまレパートリーにしている曲――すなわち、このリサイタルで歌われる曲においては、彼女の右に出る歌手は想像がつかない。

技巧的な役、リリックな役からドラマティックな役まで、軽々と歌いこなし、なにを歌っても、どんなに強く表現しても、極上の響きとやわらかさが失われない。そこに美しい舞台姿とエレガントな立ち居振る舞いが加わり、登場するやいなや、観る人の心を確実に奪ってしまう。ガランチャの主戦場は、メトロポリタン歌劇場、英ロイヤル・オペラ、ウィーン国立歌劇場、パリ・オペラ座といった世界に冠たる一流歌劇場で、彼女が歌うとなると世界中から人が集まり、チケット争奪戦が勃発する。

母国はバルト三国のラトヴィア。1976年、首都リガで合唱指導者の父、著名な歌手であった母のもとに生を享けた。だが、1990年にソビエト連邦から独立する以前のラトヴィアでは、多くの人が生活に困難を強いられたという。飽食の国の住人が忘れてしまったハングリー精神は、そこで培われたようだ。生地の音楽院を皮切りにウィーンやアメリカでも学び、1999年にヘルシンキにおける国際声楽コンクールで優勝するとともに、プロとしてのキャリアを開始。短期間で評価を確立し、2003年にウィーン国立歌劇場やザルツブルク音楽祭に抜擢されて以来、オペラ界の頂点を走り続けている。

彼女の歌はキャリアの初期から本物だった。モーツァルトを深く、やわらかく歌い、ロッシーニの歌唱至難の技巧的なフレーズを正確に、スピーディに、軽やかに歌い上げた。その表現には隙も緩みもなく、完璧と言うほかなかった。

いま、声に深みを増してきたガランチャのレパートリーは、ビゼー《カルメン》のタイトルロールはもちろんとして、サン＝サーンス《サムソンとデリラ》のデリラ、ヴェルディ《ドン・カルロ》のエボリ公女、マスカーニ《カヴァッレリア・ルスティカーナ》のサントゥッツァなど、ドラマティックな役に移ってきた。しかし、どんなに劇的な役を歌っても、彼女の声は美しさとまろやかさを少しも失わない。激しい感情や複雑な心理も、光沢をいっそう増した深い響きで歌い上げ、ほかのだれが歌うより役に説得力を与えてしまう。それはガランチャの声が、完璧なテクニックに支えられながら、望ましい発展を遂げているからにほかならない。

理想的な成熟を経て、名実ともにキャリアの頂点に登りつめたいま実現する、久しぶりの来日。絶頂期のディーヴァの芸術を味わえる、またとない機会である。

香原斗志（オペラ評論家）

©Gregor Hohenberg/DG

©Paul Schirnhofer/DG